

「ガキ少尉」

私は一九二六年（大正十五年）三月十五日、日本統治下の

朝鮮・大邱で生まれた。父の廣吉が裁判官として赴任していたためである。母は恒子、

私の履歴書

尋 千 川 金
ひろ ち がわ かな

兄弟は男ばかり四人で私は三男だった。

明治二十一年九月九日、長野県で生まれた父は旧制二高（現東北大学）を卒業し、東京帝国大学（現東京大学）の法学部法律学科に入学した。ドイツ法を学び、大正二年に卒業している。その後、朝鮮

總督府の司法官補として現地に着任した。光州や平壤などで判事を務め、大邱と京城（現ソウル）の両地方法院で上席部長を歴任した。

父には弟が二人いた。直弟で小根山家の養子となった森蔵さんと末弟の清さんで、二人とも父に続いて東大を卒業した。長野の片田舎から大学に進学する人は少なかった時

子煩悩な父に甘える

ケガ絶えず病院の常連に

代に、兄弟三人とも東大を卒業したのは極めて珍しかったと聞く。後に医学の道に進んだ清さんは新潟県の高田陸軍病院で院長を務めた。

写真は森蔵さんの長男亘さんより拝借したもので、私たち家族全員が写っている。後列岡崎は家政婦さんだ。父は子煩悩な人だったようだ。幼かった私は父に遊んでもらうのが大好きで、時々ス

リッパで父の顔をたたいたことがあるらしい。私自身は覚えていないが、父はニコニコしていて、全く怒らなかったと母に聞いた。

子どものころは野や山を駆け回って遊んでいた。虫や鳥をつかまえるのが好きで、夏の夜には蚊に刺されながらギリギリスやクツワムシなどを追いかけて回っていた。ケンカ

胸を擦りむいたので、掛かり付けの瀬戸医院という外科の病院に行った。ケガの絶えない私はその病院の常連だった。先生はとても優しい人だったが、いつもあきれ顔で「またケガをしたのか。今日は何だ」と言われたものだ。

先生に夕子さんというお嬢がいて、とてもきれいな人だった。私が中学一年のころ、犬の散歩をしていた夕子さんとすれ違い、「世の中にはこんなに美しい女性がいるのか」と思わず見とれてしまった。後に夕子さんは私の母の弟、伊藤喜九郎さんの奥さんになったが早逝された。



4歳の時、家族と（1930年、前列石から2人目が筆者）

「尋」は長さを示す単位でもあり、千尋は計り知れない深さを表す言葉として万葉集などに出てくる。父から直接聞いたことではないが、奥の深い人間になれ、という願いを込めたものと思う。アニメ映画「千と千尋の神隠し」の主人公も少女だったが、人氣者になった。今はいい名前だと言われることが多く、父に感謝している。（信越化学工業社長）